

河鍋暁斎《山姥図》

—新たな山姥イメージの創出と第二回巴里府日本美術縦覧会—

日野綾子（九州歴史資料館）

《山姥図》（東京国立博物館所蔵）は、幕末明治期に活躍した狩野派の画家、河鍋暁斎（1831 - 1889）の作である。本図は、美術団体の龍池会が明治 17 年（1884）にパリにおいて開催した第二回巴里府日本美術縦覧会に出品することを目的に制作されたとされる。暁斎の晩年の作であること、また制作背景から暁斎と「美術」行政の関わりについて考察する材料となり得ることから、暁斎の画業の中でも重要な作例と言えるが、その意義について十分に議論がなされているとは言い難い。そこで本発表においては、先行研究を踏まえたうえで、《山姥図》について図様と制作背景の両方の側面から考察することを試みる。

山姥は日本固有の山岳信仰から生じたと言われており、その存在は説話などの形態で伝承されてきたほか、芸能や造形の題材となることによってイメージの形成がなされてきた。例えば美術作品においては、江戸時代の喜多川歌麿や長沢芦雪の作例がよく知られ、前者は若い美人の姿で、後者は怪奇な存在として描かれる。他作例においてもそのどちらかの表現が選択されることが多い一方、本図ではそれらと異なる表現を用いている。吉祥性の高い衣装の文様や、神聖な動物に用いられる白色の彩色を施した熊、山姥の面貌に仏画に通じる表現が見られることから、画面に吉祥性や聖性を付与する意図があったことが読み取れる。さらに、幽霊画に用いる表現の使用や、芦雪《山姥図》からの構図の引用が見られ、これらの表現により、本図は先行作例を意識しつつも、暁斎独自の山姥イメージを表したものとなっている。

本図の制作の契機となった第二回巴里府日本美術縦覧会は、明治 12 年に官僚を中心に結成された美術団体、龍池会の事業である。この事業は、フランスのパリにおいて日本絵画を展示し販売することで当時の西洋人の趣向を査察することを目的に行われ、明治初期の殖産興業としての美術工芸品奨励政策と極めて関係が深かった。暁斎の博覧会の出品作品や『暁斎画談』からは、暁斎がこうした「美術」政策の一部に意欲的に参加していたこと、日本独自の画題の追及という課題を政府や同時代の画家と共有していたことが推察できる。また、本図における新たな山姥像の創造が、新たな「意匠」を求める龍池会の意図に沿ったものであった可能性を提示する。

これらの考察を元に、《山姥図》において暁斎が独自の山姥イメージを創出したこと、そしてそれが明治初期の「美術」行政や画家を取り巻く状況の中でこそ生み出され得るものであったことを示すことで、明治初期における暁斎の活動の一端を明らかにしたい。